

# 立山山13号墳

福岡県八女市立山所在古墳の調査

八女市文化財調査報告書

第 11 集

1984

八女市教育委員会

# 立山山 13 号 墳

福岡県八女市立山所在古墳の調査



人物埴輪

# 序

立山山古墳群の発掘調査は、昭和56年4月から同年7月までの4ヶ月間行なって昨年調査報告書が刊行されたところです。

13号墳は、立山山古墳群の一部で、前回は調査対象外でありましたが、茶園の造成のため、はからずも今回の調査となったものです。

調査は南筑後教育事務所及び県文化課ほか関係各位のご指導、ご協力によりすめられ、初期の目的を果すことができました。

調査結果については、今回刊行のはこびになり、前回調査の立山山古墳群及び岩戸山古墳を中心とする八女古墳群との関連を知るうえで、貴重な資料となるものと確信するものです。

なお、本書の刊行にあたり調査及び原稿の執筆を担当された南筑後教育事務所川述氏、県文化課伊崎氏をはじめ発掘作業をされた関係各位のご協力に対し深く感謝の意を表します。

昭和59年3月 日

八女市教育委員会

教育長 坂田 不二夫

## 例 言

- 1、この報告書は立山山古墳群内に所在する立山山13号墳の調査である
- 2、発掘調査は、昭和58年度の国庫補助を受けて、八女市教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の援助を得た。
- 3、出土遺物の整理は九州歴史資料館において岩瀬正信氏の指導のもとに行った。
- 4、出土鉄器の保存処理は九州歴史資料館学芸員横田義章氏にお願いした。
- 5、遺構の実測は県教育庁南筑後教育事務所技術主査川述昭人と県文化課技師伊崎俊秋が担当した。遺物の実測は川述が行い、土器は平田春美氏、埴輪は須山富子氏の援助を得た。遺構・遺物の製図は豊福弥生氏にお願いした。
- 6、写真は遺構については川述が、遺物については九州歴史資料館主任技師石丸洋氏と平島美代子氏が撮影した。
- 7、本報告書の執筆と編集は川述が担当した。

## 本文目次

|                   | 頁  |
|-------------------|----|
| I はじめに .....      | 1  |
| II 位置と環境 .....    | 2  |
| III 調査の内容 .....   | 4  |
| 1 13号墳周辺の調査 ..... | 4  |
| (1) 石蓋土墳墓 .....   | 4  |
| 2 13号墳の調査 .....   | 6  |
| (1) 墳丘 .....      | 6  |
| (2) 石室 .....      | 8  |
| (3) 出土遺物 .....    | 10 |
| IV おわりに .....     | 38 |

## I はじめに

立山山13号墳は立山山古墳群のうち最も西に位置した古墳である。立山山古墳群の調査は昭和56年の4月から八女市スポーツ公園の造成にともなう行われたものであり、当該墳についてはスポーツ公園造成地に含まれなかったため調査対象から外れていた。ところが昭和58年8月に土地所有者の方から立山山13号墳を含めた約3000㎡の畑地（現況はもとみかん畑）を整地して茶畑にしたい旨の連絡が八女市教育委員会に入った。このため、市は県教育庁南筑後教育事務所技術主査川述昭人と連絡をとり、早速土地所有者西村隆幸、市、県の三者による協議を現地でもった。土地所有者の方は当初13号墳をすべて削平し、なおかつ古墳以外の微高地についても削平する計画を持っていた。しかし、試掘の結果古墳周辺部には、墳丘は消失していても周溝を有する箱式石棺等を主体部にした古墳の存在が明らかになったためカットする深さについて再検討して頂くよう申し入れ、周辺部は保存されるようになった。市では58年度当初、国庫補助事業として室岡遺跡の発掘調査を予定していたが、こちらは造成工事が中止となったため当初の予算を減額して古墳の調査へ充てた。発掘調査は八女市教育委員会が事業主体となり、福岡県教育委員会の援助を得て実施した。調査は昭和58年10月5日から10月31日の間で実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

|       |                |        |             |
|-------|----------------|--------|-------------|
| 調査責任者 | 八女市教育委員会       | 教 育 長  | 坂田不二夫       |
|       |                | 社会教育課長 | 松延 繁太       |
|       |                | 係 長    | 杉山 信行       |
|       |                | 主 任    | 渡辺 勲        |
|       |                | 史 員    | 伊藤 周二       |
|       |                | 同      | 田中 博文（調査担当） |
|       |                | 同      | 松尾 弘子       |
|       |                | 同      | 川口 美文       |
| 調査担当者 | 福岡県教育庁南筑後教育事務所 | 技術主査   | 川述 昭人       |
|       | 福岡県教育庁管理部文化課   | 技 師    | 伊崎 俊秋       |
| 調査補助員 |                |        | 佐土原逸男       |

このほか、福岡県文化財保護指導委員の木附光雄氏には調査の御指導・御助言を頂いた。調査は関係各位、ならびに作業に従事された方々の協力により無事に終了することができた。ここに記して謝意を表します。



- |            |             |                   |
|------------|-------------|-------------------|
| 1. 岩戸山古墳   | 2. 乗場古墳     | 3. 善藏塚古墳          |
| 4. 茶臼塚古墳   | 5. 丸山塚古墳    | 6. 鶴見山古墳          |
| 7. 釘崎3号墳   | 8. 庚申塚古墳    | 9. 釘崎2号墳          |
| 10. 釘崎1号墳  | 11. 鹿子島山古墳群 | 12. 本古墳群          |
| 13. 立山山古墳群 | 14. 立山丸山古墳  | 15. 立山遺跡 (旧石器・縄文) |

第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

## II 位置と環境

立山山13号墳は八女市大字<sup>はちのみや</sup>本字立山に所在する立山山古墳群の西側端部近くに位置する。

八女市は福岡県の南部に広がる筑後平野の東南部に位置しており、久留米市の南東13kmの距離で、市域は北側は八女丘陵、南側は矢部川を境としている。八女市は茶の生産が盛んであり八女茶栽培に適した微高地、丘陵は多数の遺跡が所在する場所でもある。

立山山13号墳の占地する八女丘陵は一大古墳群であり、東は八女市山内付近から、西は三潞群三潞町西牟田までの10数kmをさす。古墳は西から三潞町十連寺古墳（福岡県遺跡等分布地図では清導寺古墳）・筑後市瑞王寺古墳・広川町石人山古墳・同弘化谷古墳・八女市神奈無田古墳（以下すべて八女市）岩戸山古墳・乗場古墳・善蔵塚古墳・丸山塚古墳・鶴見山古墳・釘崎1・2・3号墳・立山山古墳群・立山丸山古墳・童男山古墳などの著名なものが点在している。これらは十数基からなる前方後円墳と大型のものを含む円墳からなり、石室に装飾を有するものもみられる。矢部川添いでは星野川と矢部川が合流する付近の八女北田形の丘陵頂部には5世紀前半代に比定される箱式石棺を内部主体とし、変形神人鏡を出土した城の谷古墳が所在する。矢部川を渡った立花町には広川町の一部を除いた八女市郡では見る事のできない横穴が濃密に所在している。立花町の横穴は砂岩系の土質が基盤となっているが一部地区では凝灰岩の散布が見られ、横穴も熊本県に普遍的な凝灰岩をくり抜いたものが見られる。八女丘陵においては見る事のできない横穴が矢部川を境にして多数見られるという事は興味深い事象である。

立山山古墳群周辺部には多数の窯跡群が所在し、調査されたものもある。まず当該地より谷を挟んだ北側の丘陵斜面には九州の窯跡出土品による須恵器編年の基盤ともいべき塚ノ谷窯跡群をはじめとする中尾谷・牛焼谷・管の谷窯跡群が点存している。これらは6世紀中葉から7世紀後半までを主とし、一部は奈良時代後半までの須恵器や瓦の生産を行っている。現在までの所これより以前と思われる窯跡は発見されていないが、岩戸山を中心した八女丘陵において古式の須恵器窯跡が発見される日もそう遠い将来のように思われる。須恵器以外の窯跡としては立山山窯跡群があり、同窯は6世紀前半から中頃にかけての埴輪を焼いた九州では初めての埴輪窯であり、2基検出された。

立山山古墳群は1981年の4月から発掘調査が実施され、5世紀初頭から6世紀中頃にかけての古墳27基（内部主体は箱式石棺、竪穴式石室、竪穴系横口式石室、横穴式石室）、箱式石棺墓5基、石蓋土壇墓4基、木棺墓1基が検出された。主な出土遺物は23・25墳からは珠文鏡各1面、24号墳からは四獣鏡1面が出土した。8号墳からは垂飾付耳飾りや多数の円筒埴輪とともに馬・猪・人物等の形象埴輪が発見された。また24号墳からは陶質土器が出土している。このように立山山古墳群からは重要な遺構や遺物が多数発見されており、八女丘陵の古墳群を考察する上で非常に重要な資料となった。なお詳しくは「立山山古墳群」の発掘調査報告書に

詳述されているので参考にされたい。

|    |          |                  |          |      |
|----|----------|------------------|----------|------|
| 註1 | 「立山山古墳群」 | 八女市文化財調査報告書 第10集 | 八女市教育委員会 | 1983 |
| 2  | 「瑞王寺古墳」  | 筑後市文化財調査報告書 第3集  | 筑後市教育委員会 | 1984 |
| 3  | 「城の谷遺跡」  | 八女市文化財調査報告書 第9集  | 八女市教育委員会 | 1983 |
| 4  | 「塚ノ谷窯跡群」 | 八女古窯跡群調査報告 I     | 八女市教育委員会 | 1969 |
| 5  | 「中尾谷窯跡群」 | 八女古窯跡群調査報告 II    | 八女市教育委員会 | 1970 |
| 6  | 「管の谷窯跡群」 | 八女古窯跡群調査報告 III   | 八女市教育委員会 | 1971 |
| 7  | 「立山山窯跡群」 | 八女古窯跡群調査報告 IV    | 八女市教育委員会 | 1972 |

## Ⅲ調査の内容

### 1. 13号墳周辺の調査(第2図)

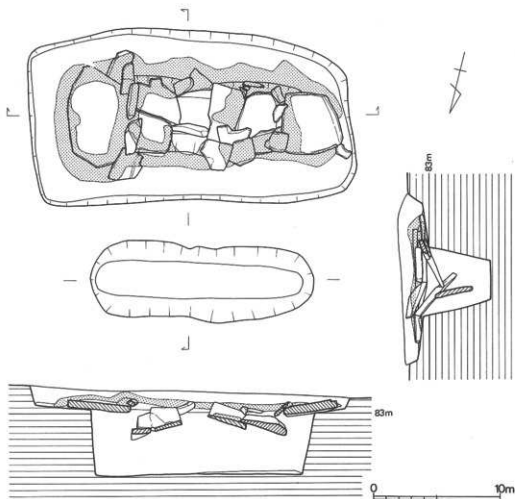
13号墳は昭和56年に八女市スポーツ公園造成工事に伴って発掘調査を実施した立山山古墳群の西側端部に位置している。この時の調査では古墳27基と箱式石棺5基、石蓋土墳墓4基・木棺墓1基が検出された。今回はこの発掘区の西端に位置した12号墳に隣接した範囲の調査であり、前回は完掘されなかった12号墳の周溝西側の一部も検出した。13号周辺部に試掘のトレンチを6本設定した結果、新たに2基の古墳が確認された。1基は13号墳の東に接する様に位置した直径約10m程の円墳であり、主体部は箱式石棺である。他の1基は13号墳の西に位置した直径約8m弱の円墳であり、主体部は不明である。いずれも幅1mの周溝を有している。

#### (1) 石蓋土墳墓(第3図、図版1)

13号墳の周溝検出作業中に石室前面部のやや北側にかたよった周溝ブリッジの位置から石蓋土墳が検出された。これは主軸をN-76°-Eにとり略東西に主軸を置くものであり、頭位は東にとるものと思われる。蓋石は扁平な石材が6枚であり、頭位と思われる東側の1枚が最も大きい。蓋石は東側から順次架構したと思われ、東側3個は各辺を接するが西側の3個は各石材の西側一辺上に他の石材をのせている。接合部の上面には扁平な割石をさらに置き、蓋石周辺と接合部には目詰めの粘土を貼っている。

墓墳の平面形は長方形を呈するものであり、規模は長さ2.53m、幅1.34m、土壌上面までの深さ15cmを測る。

二段掘りとなる土壌の平面形は隅丸長方形を呈してあり底面の規模は長さ163cm、東側小口幅25cm、西側小口幅17cm、深さ50cmを測る。床面はほぼ水平である。内部からの遺物の出土はない。



第3図 石蓋土墳実測図 (1/30)

遺物の出土がないため年代は決め難いが、13号墳の周溝掘削の際にこれを破壊するのをさけて、意識的に周溝のブリッジをこの位置に設けてこの石蓋土墳墓を保存した可能性が大である。従って13号墳よりは古く、前回調査時に検出された箱式石棺墓5基、石蓋土墳墓4基、木棺墓1基と時期を同じくするものと思われる。ちなみに前回調査の上述のものは5世紀初頭～前葉に比定されており、この年代に近いものと考えられる。

## 2. 13号墳の調査

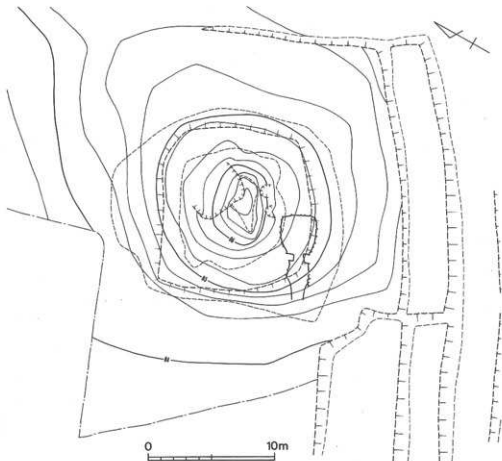
### (1) 墳丘 (第4～6図、図版2・5)

立山山古墳群の中では墳丘の遺存状態が良好な古墳である。現況はみかん園造成の際に墳丘周辺部分は段々畑となっており、旧状を呈していなかったが、墳丘中央部にかけてはかなりの盛土を残していた。発掘調査開始時の見かけの墳丘は直径17m程の円墳と思われた。

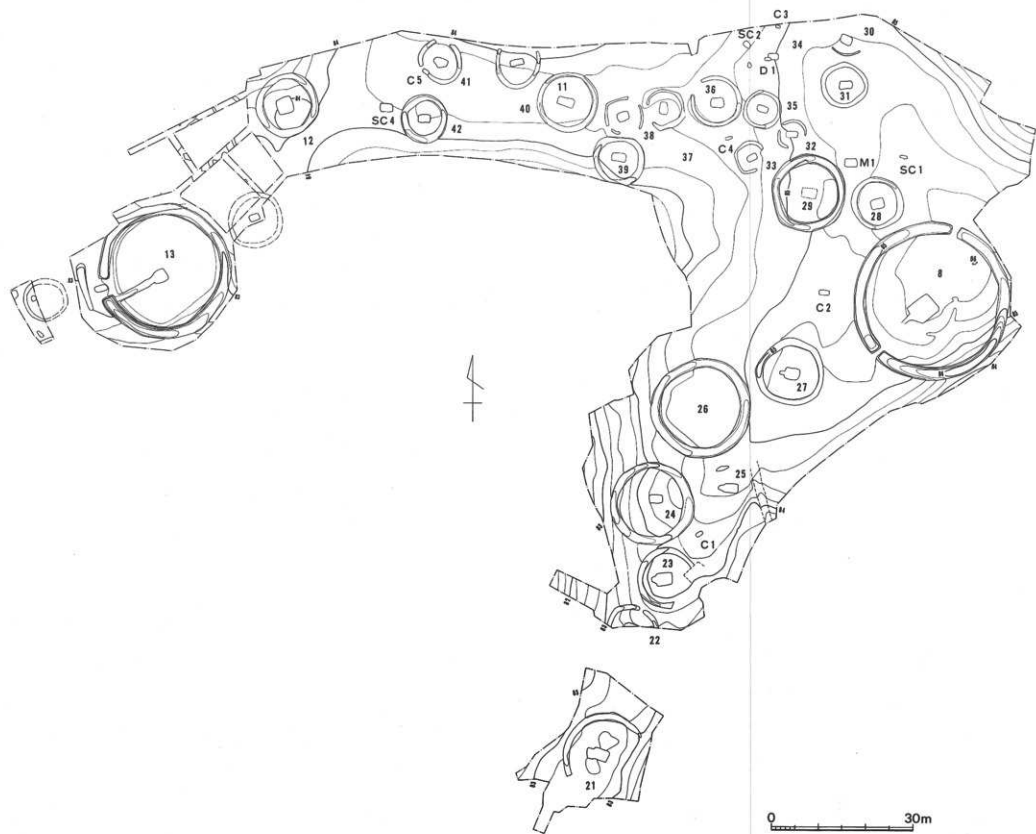
古墳は北東から南西に傾斜する標高85m程の丘陵の頂部に営まれており、墳頂部の標高は87mである。

古墳は直径24mの円墳であり、墳丘の中心は石室奥壁の中心に位置する。

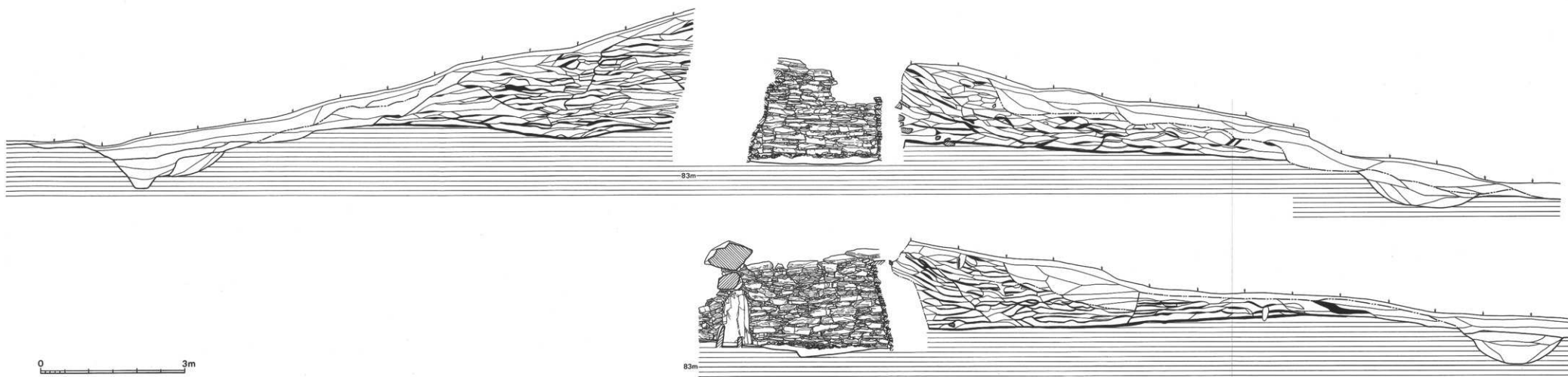
墳丘はほぼ水平に近い黒色土の旧地表面に基底面を有している。墳丘の北側トレンチでは、



第4図 立山山13号墳調査前地形測量図 (1/300)



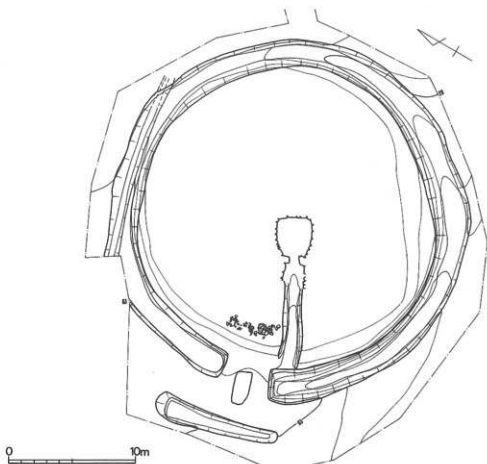
第2図 立山山古墳群地形測量図 (1/800)



第 6 图 立山山13号墳境丘土層図 (1/60)

石室中心から 5.5m の位置から石室裏面まで、石室構築と並行して、黒色土と黄褐色粘質土、灰褐色粘質土を水平位に交互に盛土する。この盛土は基底面からの高さ 2.05m であり、この高さは石室の天井石を覆う高さである。その後、この盛土端部から外方へ幅 4m の範囲を盛土する。最後に周溝より内側へ墳丘を形成する盛土を行う。この時は石室上面部にも盛土を再び行っている。周溝は石室中軸線から 12.4m の位置になる。東、南トレンチでも同じ工程の盛土方法であるが、こちらでは 1 工程の石室を覆うための盛土は水平位でなく、内面へ高くした斜め方向の盛土である。南トレンチでは墳裾部分は地山面まで段々畑により削平されていた。周溝の位置は南トレンチでは石室中軸線から 10.35m、東トレンチでは、石室中心から 13.5m の位置にある。

盛土は最も高い部分で 2.4m を測り、用いられた土は、黒色土、黄褐色粘質土、茶褐色粘質



第 5 図 立山山13号墳墳丘測量図 (1/300)

土、黒茶褐色土、灰褐色粘質土の5つを基本とし、これを一部まぜ合わせて用いている部分もある。現地ではすべての土層名を注記したが、本書では省略した。

古墳は前述の如く、直径24mの円墳であり、墳丘の中心は石室奥壁の中心にとる企画性を有したものであり、これを中心にして幅2.5mの周溝を有する。周溝を含めた墳丘は直径28mを測るものである。周溝は地山掘削のもので、深さは0.5～1.15mを測る。周溝の底面は背面の東側が最も高く、石室前面部が最も深く掘削されている。周溝は石室前面からやや北側にかたよって幅3.5mのブリッジを有する。このブリッジ前面の2.5mの位置には長さ10m、幅1～2m、深さ30cmで弧状の2重目の周溝が検出された。この周溝は、墳丘中心から17mの位置にあり、これを中心にして正円を描く。

石室前面につながる墓道の北側（左側）の盛土中からは盛土を一部カットして並べられた須恵器、土師器約60個体からなる供献用の土器列が検出された。

外部施設としては葺石は有さないが円筒埴輪や人物埴輪が墳裾近くに立てられており、いずれも周溝に転落した状態で検出された。

## (2) 石室（第7図、図版3・4）

内部主体は主軸をN-59°-Eにとり、西南西に開口する単室の横穴式石室である。石室の平面形は胴張り形態を呈するものである。

玄室は奥壁、両側壁ともにすべて片岩系統の扁平な石を平積みしている。奥壁は長さ35～70cm、高さ10～15cm大の石材を13度程内傾させて1.85m積んでいる。上述の各石材の詰め石としては片岩の小片を用いている。石材の用い方は下段部に特に大きな石材を用いることなく、全体は一様の規模のものであり、各段ごとに右の接合部分は交互になるように配慮している。奥壁と側壁との境部分は奥壁、側壁にまたがるように所謂力石として石材を用いており、このため、コーナー部分は丸味を有している。

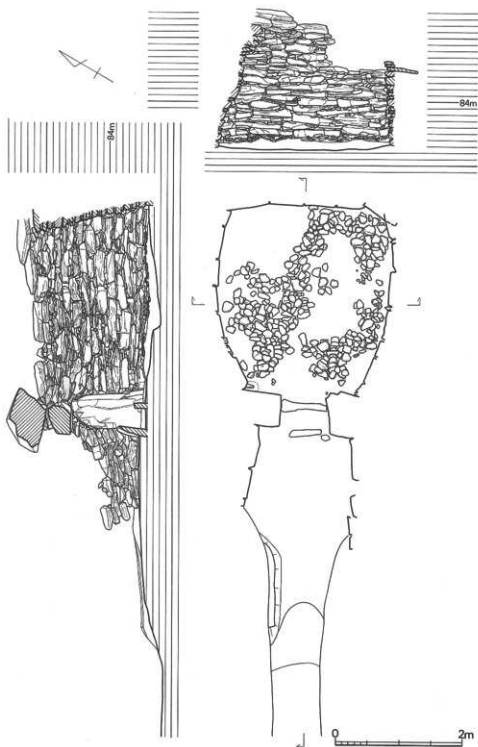
側壁の左は床面から1.7mまでは17度内傾させてあり、これより上面は内傾度が強くなる。右壁は床面から1.3mしか遺存してないが、こちらは4度とゆるやかな内傾である。

袖石は左側壁から55cm、右側壁から50cm程各々1個の石材を突出させている。袖石は幅55～60cm、床面からの高さ115cmの方柱状のものであり、上面には高さ40cm、幅50cmの柱状の石材を冠石として架構している。この上には厚さ60cm大の天井石がのる。

袖石間には長さ70cm、厚さ10～15cm、床面からの高さ20cmの板石を框石として据えている。羨道部は左壁1.3m、右壁1.75m程構築されているが、石材は玄室に比して小形となり、また積み方は水平積みでなく、玄門寄りにやや高く積み、墓道入口方向へ下降させている。

閉塞は玄門直前に板石を用いて行っていることがわかる。現存する閉塞石は、長さ50cm、厚さ10cmで墓道床面を掘り込んで立てられている。

石室の床面は河原石で敷石されているが、盗掘時にかなり攪乱を受けており、半分位しか遺



第7图 立山山13号墳石室実測図 (1/60)

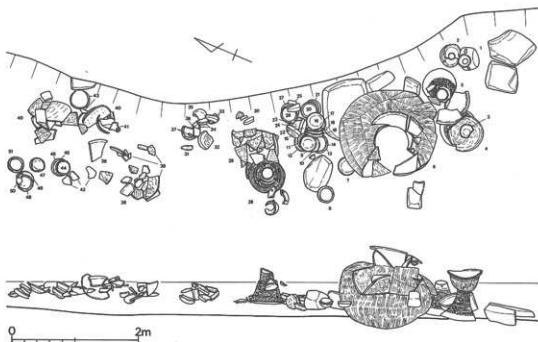
存しない。床面からは耳環 2 個が検出された。中央部分の床面は地山の凹みがあり、この部分には壁材と同一石材のバラスを詰め込んで平坦面を構成している。石室内の周壁には赤色顔料を塗布していた。

墓道は盛土開削によるもので羨道前面からの長さ 6.5m を測る。底面部の幅は墓道中央部で 80cm、深さは約 1m を測る。前面は北側へ開く。

### (3) 出土遺物 (第 8 ~ 24 図、図版 6 ~ 22)

#### ① 遺物出土状態 (第 8 図、図版 6 ~ 9)

出土遺物は装身具・鉄器・土器・埴輪である。装身具では耳環が 3 個玄室内から出土した。銀環の 2 個は床面から、金環の 1 個は攪乱土中から検出された。鉄器類は馬具の轡をはじめその大半が羨道部もしくは羨道部よりの墓道から検出された。鞍のみが玄室内出土品である。大刀に付属する金具類は玄室からの出土品である。周溝内からは鉄鏃 1 本と、鉄鎌が検出された。須恵器・土師器の土器類は玄室からの出土はなく、すべて墳丘もしくは周溝からのものである。特に墓道の左側(北側)にあたる墳丘前面からは須恵器・土師器 56 個体以上からなる土器列が検出された。この土器列は墳丘の裾近くの盛土を円周にそって長さ 5m 程カットしており、各種の土器を整然と供献している。まず墓道に近い部分には 2 個の器台を立て、その背後には提瓶と甕を立てて並べる。その左には大型甕 1 個を地山を掘りくぼめて据え、なお安定をよくするために石をかませている。さらに杯、裝飾付器台、中型甕、横瓶、高杯などが並べもしくは



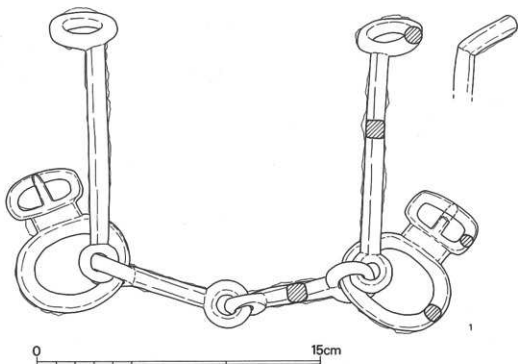
第 8 図 立山山13号墳土器列実測図 (1/30)

は置かれており、最後に土師器をまとめて置いている。土器の大半は原位置を保っており、立てたままの状態のものが多い。この部分は墳丘の裾近くの位置ではあっても明らかに墳丘内に包含される部分であるので、墓前祭が終了した後はある程度の盛土を行ったものと思われる。ただし此の部分の盛土は墳丘の他の部分で行われたような瓦層を呈するものではない。この土器列前面の周溝内からは埴輪とともに須恵器・土師器が検出されたが、この部分からの出土品は前述した土器列とはすべて1時期新しい時代のもばかりである。これらは追葬時の供献品であろう。

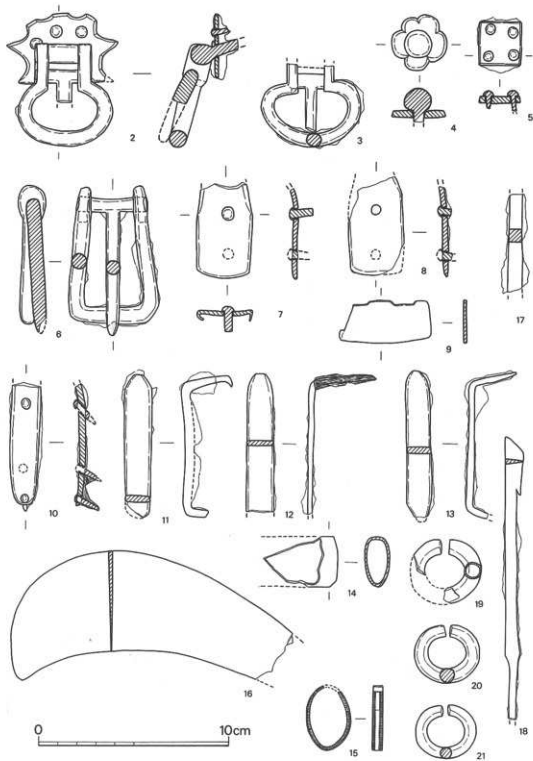
埴輪は周溝内に転倒して破砕した状態で出土したものが大半であり、墳丘からも若干検出したが原位置を保ったものはなかった。埴輪は円筒埴輪が多数をしめたが、人物5個をはじめとする形象埴輪も出土している。人物埴輪は周溝ブリッジの右側から2個体、左側からは3個体出土したが他の部分からは検出されなかった。円筒埴輪は周溝の全体の場所から出土しており墳丘築造時には全体に一樣に立て並べたものと思われる。

## ② 装身具 (第10図、図版10)

耳環 (19~21) 19は中空の金環である。一部を欠損するが長径約37mm、短径34mmを測る。環の断面は直径8mmで円形を呈する。重量は4.8gである。20・21は大きさの異なる銀環であり対にはならない。20は長径34mm、短径30mmであり、断面は長径7.5mm、短径7mmの楕円形を呈



第9図 骨実測図 (1/2)



第10図 装身具、鉄器実測図 (1/2)

する。21は20より小型で、長径31.5mm、短径28mmであり、断面は直径5.9mmを測り円形を呈する。20は22.6g、21は12.1gである。

### ③鉄器（第9～10図、図版10）

甕（1）銜・鏡板・引手を完存する。遺存状態は良好であり、錆着も少なく、各連結部分は可動する。銜は断面が隅丸方形を呈する鉄棒を2連結するものであり、全長15cmを測る。引手は断面が方形を呈する鉄棒の両端に円環をとりつけており、引手壺は直径3.2cmを測る円形を呈するものである。引手は全長14.2～14.5cmである。鏡板は楕円形を呈する環に刺金を有する立間をとりつけたものである。銜の環部で鏡板、引手壺を連結させる構造のものである。

輪鍔（7・8・10）7と8は1個体の鍔を形成するものであるが柄の部分に欠損する。現存する上部はいずれも外湾しており、やや幅も狭くなる。2鍔を有するものであり、鍔の釘は太い。足の沓込み部分は木製品であり、内面には木質が遺存している。10は細味のものであり、3鍔を有する。上部はわずかに外湾する。内面には上下方向に木目の通った木質が遺存する。

鞆（2・3）2は刺金の一部を欠損している。座金具の底辺は直線であり、左右に突起を有する。上面は2カ所に凹みをもつ。鍔は上部に3個、底辺近くの左右に各1個の5鍔で鞍橋に打ちつけてある。鉸具は別造りの軸部が2本あり、上部のそれは背面中央部に鞍橋に打ち込まれる足を持つ、3は鉸具の下半部であり、2と対をなすものと思われる。

鉸具（6）本体は円形の鉄棒をU字状に折り曲げ、一方に別造りの軸部をもうけたものであり、この軸部には長さ6.4cmの刺金を接合する。

留金具（4・5）4は5葉の座金具の中央に径1.4cmで平面、断面ともに円形の鍔を有するものである。座金具・鍔ともに鉄地金銅張製品である。5は一辺2.2～2.3cmを測り方形を呈するものであり、4鍔を有する。

鍔（11～13）全長7.5cmと8cmを測る2種がある。いずれも両側に木製品に打ち込ませる足部をもつ。足部の長さは2.5～3.5cm程である。木目は鍔の長軸に対して直交する方向に向く。

刀装具（14・15）14は鉄製品の鞘尻金具である。15は銅地金銅張りの刀装具である。幅5mm厚さ1mm、長径34mm、短径2.15mmを測る。両側には刻み目を入れている。

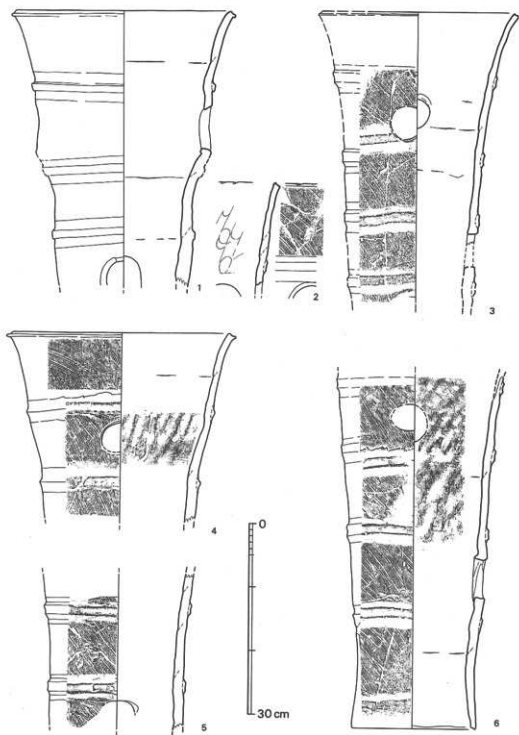
鐙（16）柄に近い基部に欠損している。刀部は先端近くを大きく内湾させる形態のもので薄手造りである。最大部幅5.3cm、現存長14.7cmを測る。

鉄鐙（18）寛被脇挟片刀箭式である。基部をわずかに欠損している。全長15cmを測る。

不明鉄器（9・17）9は長辺の一辺に2カ所の切り込み面を有するものである。17は断面方形を呈する鉄棒であり、甕の一部であろうか。

### ④埴輪（第11～15図、図版10～14）

円筒埴輪（普通形、朝顔形）と形象埴輪があり、円筒埴輪は墳丘（主として周溝内）の全面



第11図 円筒埴輪実測図 (1/6)

から、形象埴輪は石室前面部の左右から検出された。両者ともに原位置を保ったものがないためその配列状態は不明である。

円筒埴輪の量はかなりの量であり、すべてを復元する事は不可能であった。埴輪の個体数を検討するために完形品の埴輪 2 個（当該墳出土品には完形品がないため前回調査した立山山 8 号墳出土品を用いた）の重さを計測し、その平均値 13.7kg を得た。当該墳出土の円筒埴輪の破片総量は 1010.4kg でありこれを 13.7kg で割ると 74 体という数字を得る。墳丘は内径が 24m であるため、墳裾部の円周は 75.4m となる。したがって 1 列に並べたものとして単純計算するとほぼ 1m 間隔に 1 個の割り合いで円筒埴輪を立てたことになり一応の目安となろう。

#### 円筒埴輪（1～19）

1～11 は普通円筒埴輪、12～19 は朝顔形円筒埴輪である。

器形の特徴は次の如くである。

##### A 形態

口縁部はわずかに外反しており、口縁端部は平坦面をなすものと、わずかに凹ませるものがある。

突帯は普通円筒埴輪は 4 段に配置されており、高さは 3～5mm で台形を呈するものであり、突帯の頂部をわずかに凹湾させたものが多い。突帯は刷毛目調整後に貼付しており、突帯下に刷毛目がみられる。

底部は平坦面をなすものと、凹湾させるものとがみられる。

透孔は円形のもので、下から 2 区目（突帯が 4 段に入るので全体は 5 区にわけられる）と 4 区目に各々相對した位置に入れられる。朝顔形円筒埴輪には三角形透孔が見られる。

規模は普通形円筒埴輪は口径 31.5～35cm、現存高 57cm（復元高 66～68cm）、底径 19.5cm を測る。朝顔形円筒埴輪は口径 49.5～58.5cm を測る。

##### B 調整、整形技法

（外面）

刷毛目は全面に見られ、いづれも右下から左斜め上方へ施されている。

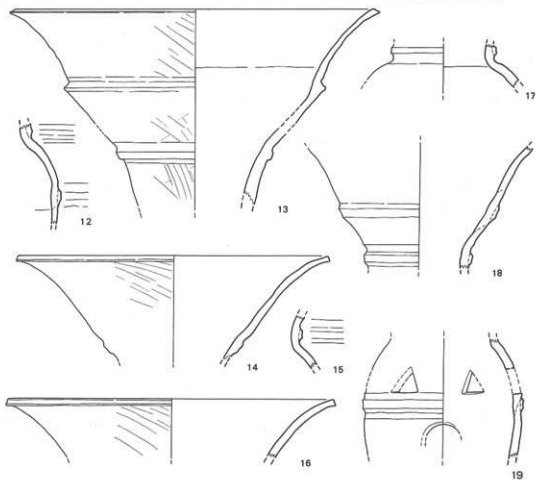
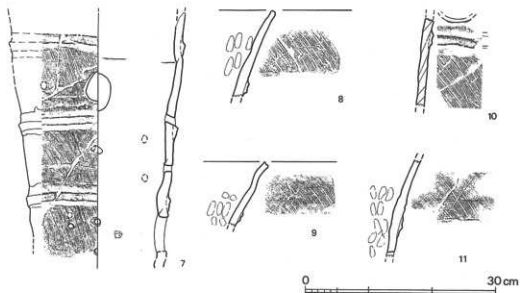
横ナデは口縁部周辺と突帯周辺に行われており、布状のものをあてがって行うものもある。口頸部にはヘラによる 3 種類の線刻がみられる。

（内面）

全面にナデ調整を施しており、指頭による右斜め上方への彫りの深いナデもみられる。このナデは長く連続させるものと、小範囲のくり返しのものがある。

##### C 胎土・焼成・色調

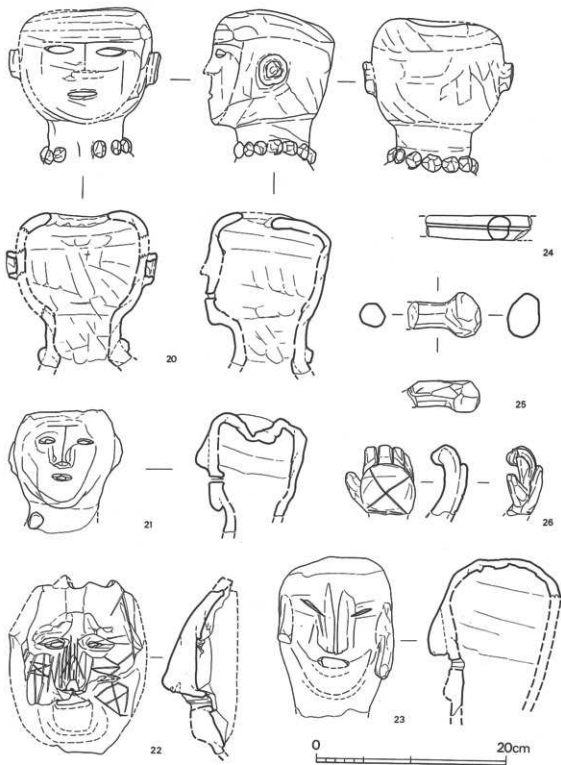
胎土にはいづれも多数の砂粒を含んでいる。色調は明るい茶色系統が多く、赤褐色、黄褐色を呈するものもみられる。焼成はいづれも良好である。



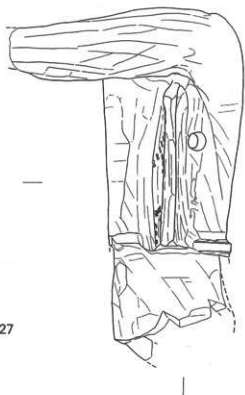
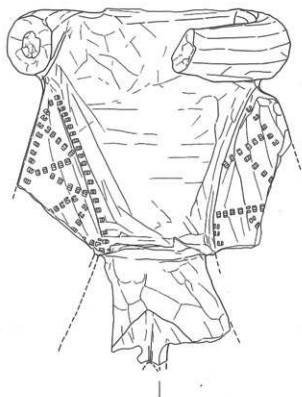
第12図 円筒墳輪夾測図 (1/5)

### 形象埴輪 (第13～15図、図版10～12)

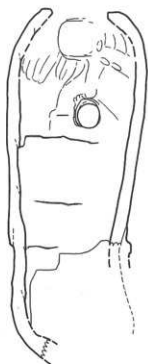
人物 (20～23、26～29) 20・26・27・28は周溝内の右側 (南側) 部分から出土し、他はブリッジを挟んで反対側の左側周溝から出土している。20は27と同一個体であり接合する。20は鼻すじが通り、眉にあたる部分は稜線で表現されている。目は細長く、ほぼ水平に切り込みを入れている。口は水平に表現され、わずかに開く。耳は直径 3.5cm、高さ 1cm、幅 5mm程の円環を貼付している。頭部はくぼんでおり、額の上部には剝離痕が残っており、頭部は髪を結っていた事がうかがえる。首には径 1.5～2cmの玉14個からなる首飾りをつけている。顔は幅14cm 頭部までの長さ12cmを測る。胸部は女性的なふくらみを表現している。両側のひれには装飾を添えるために2個1組からなる刺突文を入れ衣服の縫い目を表現する。腕は右腕がやや上方にあり、両手で品物を握った状態を表現したものであろう。腰は下方へ行くに従って開いているためスカートをはいたと思われる。足部は現存しないが立山山8号墳出土例の如く靴を履き、円筒上に立てたことがうかがえる。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好である。21は顔面部分のみである。頭頂部を凹湾させており、額上面には剝離痕があるため、髪を結ったものと思われる。口もとは小さくわずかに開く。耳は粘土を貼付しただけの簡単なものであり、20のそれとは趣が違ふ。首飾りをつけており、玉が数個残っている。顔の幅は10.5cm、頭部までの長さ10cmを測る。色調は淡い茶色を呈し、焼成は良好である。胎土には細砂粒をわずかに含んでいる。美豆良の表現がないため女性像と考える。22は顔面の前面部のみであり、後頭部を欠損する。頭部は山形の切り込みを有する。鼻は太く高い。彫りの深い目は、左右の形状が異なる。頬・鼻・鼻の左右にヘラによる線刻を入れており、入れ墨を表現したものであろうか。顔の表情などからも何か不気味な感じを受ける。美豆良の一部を遺存する。黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。23は非常に鼻が高く、鼻すじも通ったものであり、目は線刻状に細く入れ目尻の上った厳しい表現である。口は長方形状に開いている。美豆良の下半部を折損する。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。28は胸部から足部にかけてのものであり、いづれの顔とも接合しない。足部は湾曲しており、騎馬に乗った人物を表現している。襟は右前で合わせてあり、襟首と衣服の合わせ目には2個1組の刺突文を配置して縫い目を表現する。胸部と腕部にはいく筋もの線刻により三角形、方形の衣服の模様を表現している。色調は茶色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。29は足部であり片方のみ検出された。腰には紐を巻いており片側には紐の結び目が垂下する。足首には袴の裾を紐で結んでおり、足首には三段に線刻を入れ、各々の段には線刻による三角形を連続させた模様を入れる。茶色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。26は右手首であり、手甲をし、ヘラによる線刻がみられる。指先はわずかに曲げている。茶色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。



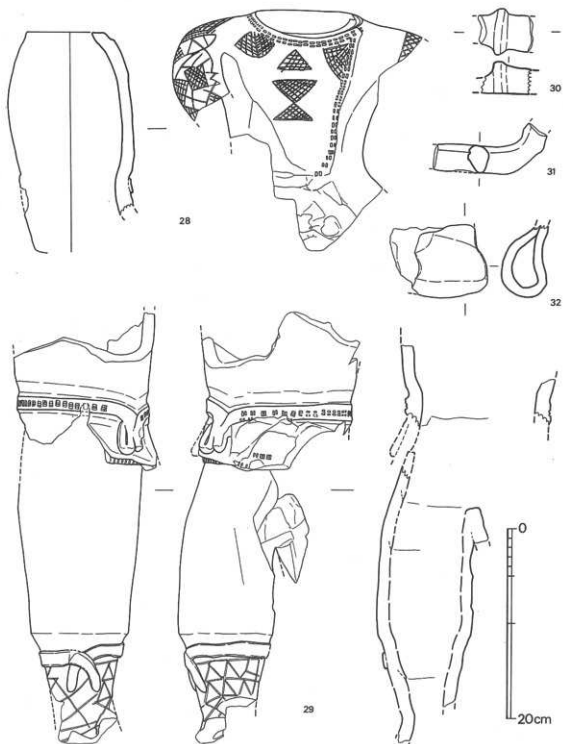
第13圖 形象墳輪実測圖 (1/4)



27



第14图 形象罐轴突测图 (1/4)



第15图 形象埴輪実測図 (1/4)

大刀 (25・30) 25は環頭大刀と思われ、ヘラによる面取りを全面に施す。30は鐔の部分である。背面は平坦面をなし、人物埴輪に張り付けたものが剥離したものである。

鍔 (32) 壺鍔であり、右側の片方のみを遺存する。壺部分のみであり、背面の張り付け部は凹湾している。28の騎馬に乗った人物埴輪に伴うものと思われる。

不明品 (24・31) 24は円柱状のものであり、ヘラによる2条の沈線が入る。31は屈曲面を有するものである。いずれも一面に接合した痕跡を残している。

#### ⑤ 土器 (第16～24図、図版15～22)

##### 須恵器 (第16～23図、図版15～21)

##### 杯蓋 (1～14、16～18、20～25)

杯蓋は天井部と体部の境の形態、口縁端部内面の形態、口径等から次の如くに分類する。

I a類 (1) 天井部と体部の境は鋭く稜を有して突出しており、口縁端部は器壁が厚く、内面に段を有している。天井部は扁平であり箱形を呈している。

I b類 (2～6) 天井部と体部の境は稜を有してわずかに突出しており、口縁端部内面には沈線を配する。口径はa類とほぼ同大であるが器高が高い。

I c類 (7～13) 天井部と体部の境の稜は消え、この部分に沈線を配する。口縁端部内面はb類と同様沈線を入れているが、沈線はかすかなものがみられる。b類とは器高に差はみられないが、口径はひとまわり大型となる。

I d類 (14～20) 天井部と体部の境には沈線を配し、口縁端部内面にも沈線を施している点はc類と同じ特徴をもつが、口径が小さくなり、器高は厚くがっしりした感じである。

II類 (21～25) 天井部と体部の境には凹湾気味の沈線を配しており、口縁端部内面は傾斜した平坦面をもつ。口径に比して器高が低くなる。

##### 杯身 (15・19・26～44)

杯身は立ち上りの形態、口径等から次の如くに分類する。

I b類 (26～28) 立ち上りは1.8cmと長く、内傾する。口縁部内面は端部から4～6mm下方に段を有するものである。

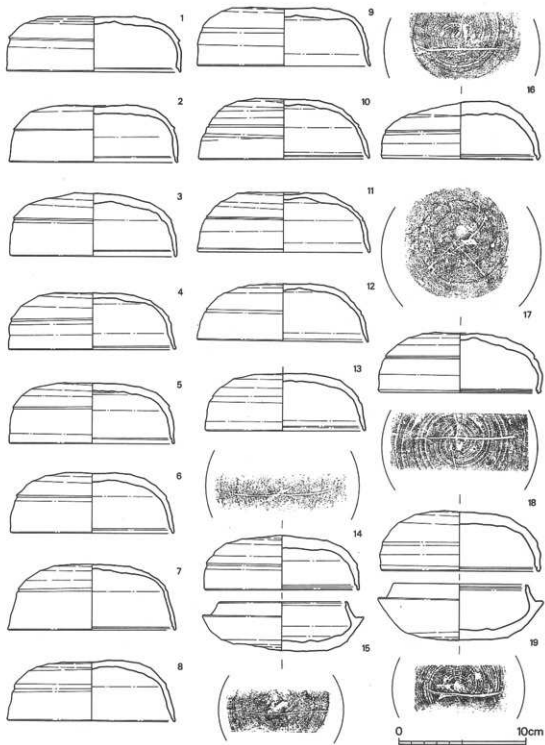
I c類 (29～35) 立ち上りは、1.4～1.6 cmであり、立ち上りの器壁は全体に厚手である。口縁端部内面には沈線を配する。口径11.1～12.2cmを測る。

I d類 (15・19・36) 立ち上りの形態はc類と同じであるが、口径は9cm前後と小型である。

I e類 (37～39) 立ち上りは1.4～1.7 cmを測り、口縁端部は丸くつくられている。

II類 (40～43) 立ち上りは基部から内傾し、途中から立ちぎみとなる。口径に比して器高は低い。

III類 (44) 立ち上りは1.4cmを測り内傾する。口縁端部は丸味を有する。底部外面は当該出土品のうち唯一の静止ヘラ削り調整である。



第16図 須恵器実測図 (1/3)



高杯（45～47）長脚2段透孔の入る45と、透孔の入らない46・47とがある。45の高杯は杯部ほどに鋭く稜を有する。46・47は長脚の高杯であり脚中央部に沈線を配する。

直口壺（48・49）48は湾曲ぎみに外反する口頸部を有しており頸部外面には波状文を施す。胴部中央とやや上面に沈線を配し、この間に刺突文を施す。49の頸部は外反し、口縁部は立つ。胴部中央に1条の沈線を配し、上下に刺突文を施す。

提瓶（50・52・53）小型と大型の2種がある。52は鉤状の把手を有しており、胴部の背面は平坦面をなす。50・53は把手のつかないものであり、50は胴部の背面も丸味を有するが53は平坦面を有する。口縁端部上面は平坦面を有する。

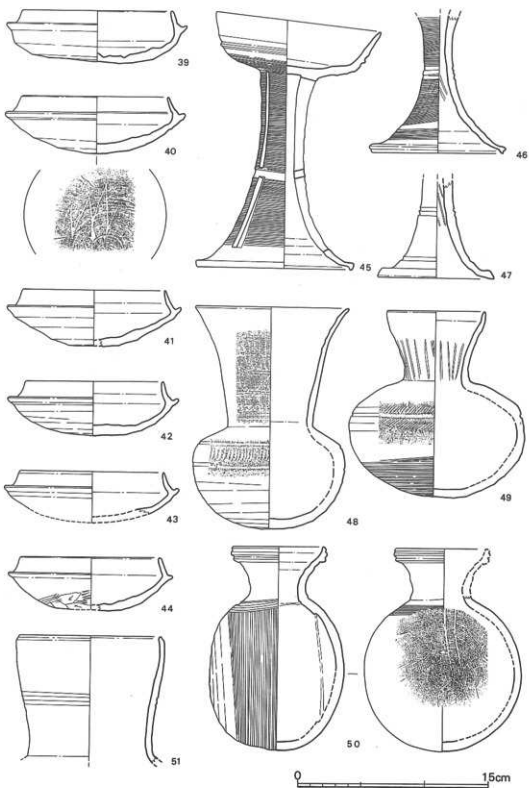
甌（54・55）54の甌は同方向に並んで2個の円孔をもつ珍品である。胴部に比して口頸部は短く、口縁部は頸部より段を有して短く外反する。55は頸部の内外面にしぼり痕を有する。頸部は長く外反しており、口縁部との境に段を有する。

子持ち壺（56）有蓋の壺であるが蓋は検出されなかった。口縁部は内傾しており、端部は丸い。肩部に小型の壺が1個だけ確認された。胴部はカキ目調整を施している。

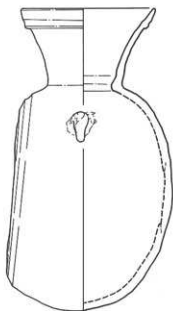
器台（57～64）2種類の形態がみられる。1つは高杯形をした通有の器台57・58と他は筒形器台59・63・64である。57・58はほぼ同じ形態のものであるが細部で若干の相異をみせる。口縁部は杯体部より大きく外反して屈曲面を有し、口唇部下面に1条の凹線を配する。57は脚部の4カ所に凹線を配して5段に区切り、2～5段の最上部には円形（3カ所）、以下には三角形（4カ所）の透孔を有する。58は脚部の5カ所に凹線を配して6段に区切り、2～6段目の最上部は円形（3カ所）、以下には三角形（4・5段は3カ所に2・3段は4カ所）の透孔をもつ。3段目には三角形透孔とは別に鳥を表現した透孔が1カ所入る。59の筒形器台は脚下半部を欠損する。口縁部を肥厚させるだけで屈曲面を有さない。杯部は前者に比して浅いものとなる。3段に3カ所の長方形透孔が入る。63・64は同一個体であるが一部を欠損するため接合しない。杯部の口縁直下には6個の張りつけによる鉤状の装飾をもつ器台である。杯部は脚部よりはわずかに口径が大きく、口唇部は平坦面をなす。63は2段に64は5段に3カ所の台形透孔が入る。復元すれば脚部は9段に分けられ2～9段目に透孔を配するものであろう。4段目と5段目の境に屈曲面を有する。

横瓶（65・66）いづれも口頸部と胴部上面を欠損している。両者は形の大小はあっても形態上は似通っている。

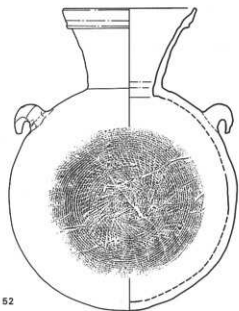
甕（67～70）小形甕67と中形甕68、大形甕70の3種類がある。69は口唇部に粘土を貼付して肥厚させ2条の凹線を配し、頸部に凹線と波状文を入れる。頸部に1カ所内外両方向からの穿孔による円孔を有する。70は口唇部を肥厚させ下面に凹線を配する。頸部は3カ所に1～2条の凹線を入れて4段に分け、上部の3段に波状文を配している。



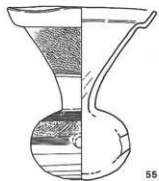
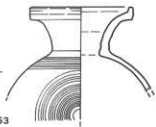
第18图 须惠器実測図 (1/3)



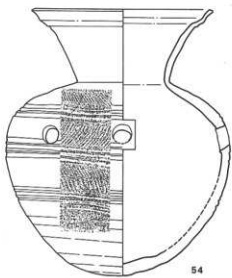
52



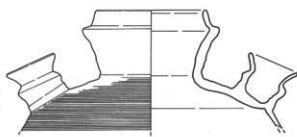
53



55



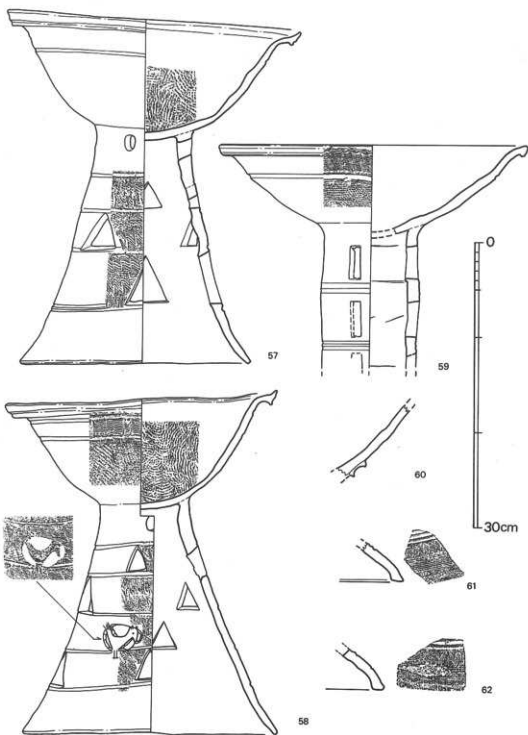
54



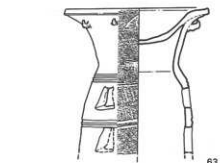
56



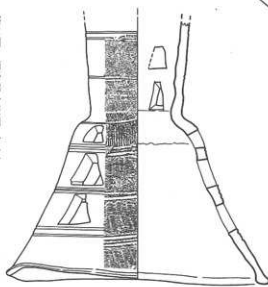
第19図 須恵器実測図 (1/3)



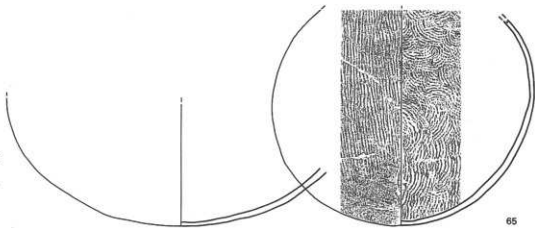
第20図 須恵器実測図 (1/4)



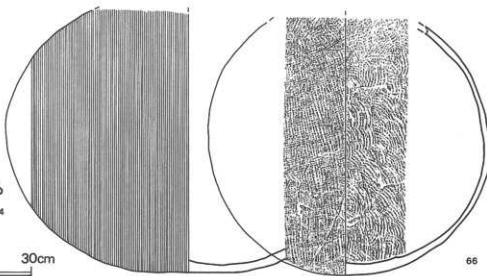
63



64



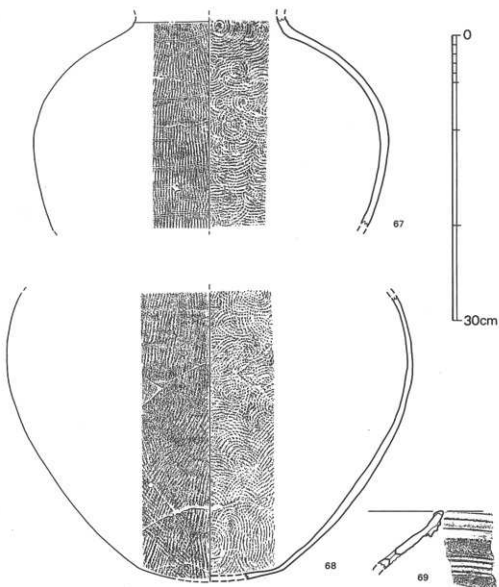
65



66



第21圖 須惠器実測図 (1/4)

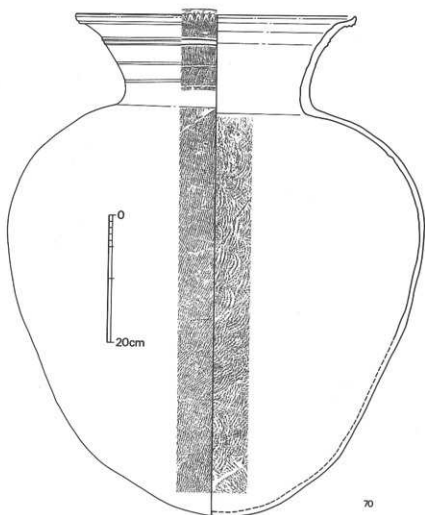


第22図 須恵器実測図 (1/4)

土師器 (第24図、図版21・22)

杯 (71・72) 71は内傾する口縁部を有しており、口径に比して器高は低い。72は須恵器の杯身を模倣して造られたものである。口縁部を肥厚させた内傾する立ち上りは長さ 1.5cmを測る。体部内面はヘラ磨き、外面はヘラ削りを施す。

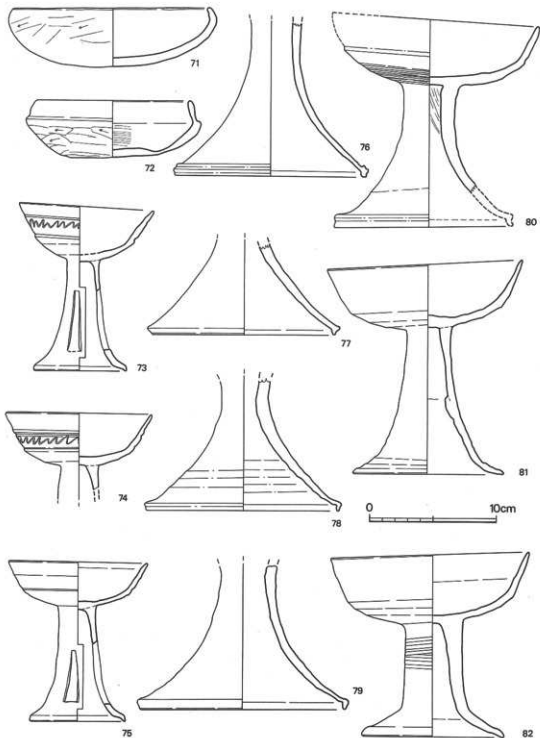
高杯 (73~82) 73~75は小型の高杯であり、脚部には1段の長方形透孔が入る。杯部には2カ所に沈線を配し、73・74はこの沈線間にヘラ線刻による波状文を入れた特異なものである。



第23図 須恵器実測図 (1/6)

脚端部の側面はいづれも平坦である。80は杯部の底部との境に凹線を入れる。脚裾部の側面に凹線を入れ、内面は段を有する。81・82は脚端部は平坦面をなす。82は脚柱部と脚裾部の境に屈曲面を有する。

須恵器では杯蓋をⅠa～d、Ⅱ類に分類し、杯身ではⅠb～e、Ⅱ、Ⅲ類に分類したが蓋・身とも例えば蓋Ⅰbは身Ⅰbという如くに対応する。Ⅰ類はⅢA期に属するがa類は当該墳出土品中でも最も古式であり、Ⅱ期に接近した形態である。ⅡはⅢB期、ⅢはⅣ期に属すると思われる。土器列の一括品はⅢA期に属し、周溝出土品はⅢB期、Ⅳ期に属し追葬品と思われる。それぞれの時期については表を参照されたい。ⅢA期は6世紀中葉に比定されるが、当該墳出土品はⅢA期でも古式に位置づけられ、実年代は6世紀中葉の前半代に近い時期に比定する。



第24圖 土師器実測図 (1/3)

須 恵 器 観 察 表

| 番号 | 器 種 | 法 量<br>(cm)           | 特 徴                                                                                | 砂 粒 移<br>動 方 向 | 時 期 | 出土<br>地点 |
|----|-----|-----------------------|------------------------------------------------------------------------------------|----------------|-----|----------|
| 1  | 杯 蓋 | 口 径 13.80<br>器 高 4.25 | 天井部と体部の境は鋭く突出し、稜がつく。口縁端部内面は段がつく。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整。灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。              | 左まわり           | Ⅲ A | 36       |
| 2  | 杯 蓋 | 口 径 13.40<br>器 高 4.45 | 天井部と体部の境は稜がつきやや突出する。口縁端部内面は沈線が入る。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を多く含む。       | 左まわり           | Ⅲ A | 22       |
| 3  | 杯 蓋 | 口 径 13.20<br>器 高 4.95 | 天井部と体部の境は突出し、稜が入る。口縁端部内面に沈線を配する。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整である。暗灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。          | 左まわり           | Ⅲ A | 15       |
| 4  | 杯 蓋 | 口 径 13.20<br>器 高 4.40 | 天井部と体部の境はやや突出し稜が入る。口縁端部内面には沈線が入る。天井部外面はヘラ削りし、頂部内面はナデ、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を含む。 | 左まわり           | Ⅲ A | 32       |
| 5  | 杯 蓋 | 口 径 13.00<br>器 高 4.75 | 天井部と体部の境は突出し、稜が入る。口縁端部内面は沈線が入る。天井部外面はヘラ削り、他は横ナデ調整である。灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を含む。          | 左まわり           | Ⅲ A | 21       |
| 6  | 杯 蓋 | 口 径 13.00<br>器 高 4.70 | 天井部と体部の境は突出し、稜が入る。口縁端部内面は甘い沈線を配する。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を含む。        | 左まわり           | Ⅲ A | 9        |
| 7  | 杯 蓋 | 口 径 13.20<br>器 高 5.15 | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に浅い沈線を配する。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。           | 右まわり           | Ⅲ A | 57       |
| 8  | 杯 蓋 | 口 径 13.30<br>器 高 4.10 | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面はわずかに沈線がみられる。天井部外面はヘラ削りし、頂部内面はナデ、他は横ナデを施す。暗灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。  | 右まわり           | Ⅲ A | 16       |
| 9  | 杯 蓋 | 口 径 13.80<br>器 高 4.45 | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面はかすかに沈線がみられる。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。        | 右まわり           | Ⅲ A | 24       |
| 10 | 杯 蓋 | 口 径 13.50<br>器 高 4.80 | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に沈線を施す。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。              | 右まわり           | Ⅲ A | 10       |
| 11 | 杯 蓋 | 口 径 13.70<br>器 高 4.75 | 天井部と体部の境は鋭く沈線が入り、口縁端部内面はわずかに沈線が入る。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整。灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。         | 右まわり           | Ⅲ A | 7        |
| 12 | 杯 蓋 | 口 径 13.60<br>器 高 4.55 | 天井部と体部の境は沈線が入り、口縁端部内面にはわずかに沈線が入る。天井部外面はヘラ削りし、内面は横ナデ調整である。灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。      | 右まわり           | Ⅲ A | 25       |

| 番号 | 器 種 | 法 量<br>(cm)                         | 特 徴                                                                                 | 砂 粒 移<br>動 方 向 | 時 期 | 出土<br>地点 |
|----|-----|-------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|----------------|-----|----------|
| 13 | 杯 蓋 | 口 径 12.80<br>器 高 4.50               | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面にはわずかに沈線が入る。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整である。青灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。       | 右まわり           | Ⅲ A | 11       |
| 14 | 杯 蓋 | 口 径 12.30<br>器 高 4.25               | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に幅の広い沈線を配する。天井部外面はヘラ削りし、頂部内面はナデ、他は横ナデを施す。青灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。    | 左まわり           | Ⅲ A | 14       |
| 15 | 杯 身 | 口 径 10.20<br>器 高 3.85<br>立ち上り高 1.20 | 立ち上りは内傾し、口縁端部に沈線を配する。底部外面はヘラ削りし、底部内面はナデ、他は横ナデを施す。青灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。 14とセット       | 左まわり           | Ⅲ A | 51       |
| 16 | 杯 蓋 | 口 径 12.60<br>器 高 4.45               | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に沈線を配する。天井部外面はヘラ削りし、内面はナデ、他は横ナデを施す。青灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。          | 左まわり           | Ⅲ A | 47       |
| 17 | 杯 蓋 | 口 径 13.00<br>器 高 4.60               | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に沈線を配する。天井部外面はヘラ削りし、頂部内面はナデ、他は横ナデ調整。青灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。      | 左まわり           | Ⅲ A | 46       |
| 18 | 杯 蓋 | 口 径 12.6<br>器 高 4.60                | 天井部と体部の境に横の甘い沈線が入り、口縁端部内面に沈線が入る。天井部外面はヘラ削りし、頂部内面はナデ、他は横ナデを施す。灰褐色、焼成不良、胎土に砂粒を含む。     | 左まわり           | Ⅲ A | 49       |
| 19 | 杯 身 | 口 径 10.60<br>器 高 4.40<br>立ち上り高 1.30 | 内傾する立ち上り端部の内面に沈線が入る。底部外面はヘラ削りし、内底部はナデ、他は横ナデを施す。灰褐色を呈し、焼成不良。胎土に砂粒を含む。 49とセット         | 左まわり           | Ⅲ A | 48       |
| 20 | 杯 蓋 | 口 径 13.00                           | 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に沈線を施す。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整である。青灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。            | 右まわり           | Ⅲ A | 30       |
| 21 | 杯 蓋 | 口 径 13.30<br>器 高 4.45               | 天井部と体部の境は凹湾ぎみの沈線が入り、口縁端部内面は内傾する平坦面を有する。上部に細い沈線を配す。天井部外面はヘラ削りし、内面はナデ、他は横ナデ。小豆色、焼成良好。 | 右まわり           | Ⅲ B | 周溝       |
| 22 | 杯 蓋 | 口 径 13.20<br>器 高 4.30               | 天井部と体部の境は凹線が入り、口縁端部内面は内傾する平坦面を有す。天井部外面はヘラ削りし、内面はナデ、他は横ナデを施す。暗灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。      | 右まわり           | Ⅲ B | 周溝       |
| 23 | 杯 蓋 | 口 径 13.00<br>器 高 4.40               | 天井部と体部の境は2条の沈線が入り、口縁端部内面は内傾する平坦面を有する。天井部外面はヘラ削りし、内面はナデ、他は横ナデを施す。灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。   | 右まわり           | Ⅲ B | 周溝       |
| 24 | 杯 蓋 | 口 径 13.30<br>器 高 4.00               | 天井部と体部の境に凹線が入り、口縁端部内面は内傾する平坦面を有する。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデである。灰小豆色、焼成不良、胎土に砂粒を多く含む。        | 左まわり           | Ⅲ B | 周溝       |

| 番号 | 器 種 | 法 量<br>(cm)                         | 特 徴                                                                                | 砂 粒 移<br>動 方 向 | 時 期 | 出土<br>地点 |
|----|-----|-------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|----------------|-----|----------|
| 25 | 杯 蓋 | 口 径 12.40<br>器 高 4.30               | 天井部と体部の境に2条の沈線が入り、口縁部内面は内傾する平坦面を有する。天井部外面はへら削りし、内面はナデ、他は横ナデ調整。灰小豆色、焼成不良、胎土に砂粒を少し含む | 右まわり           | Ⅲ B | 周溝       |
| 26 | 杯 身 | 口 径 11.00<br>器 高 4.65<br>立ち上り高 1.70 | 立ち上りは長く、内傾する口縁部内面は5mm下方に段を有する。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整である。青灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。          | 左まわり           | Ⅲ A | 26       |
| 27 | 杯 身 | 口 径 11.60<br>器 高 4.60<br>立ち上り高 1.70 | 立ち上りは長く内傾する。口縁部内面は4mm下方に段を有する。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を多量に含む。          | 左まわり           | Ⅲ A | 12       |
| 28 | 杯 身 | 口 径 11.00<br>器 高 5.00<br>立ち上り高 1.65 | 立ち上りは長く内傾する。口縁部内面は4mm下方に鈍い段を有する。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。           | 左まわり           | Ⅲ A | 17       |
| 29 | 杯 身 | 口 径 11.60<br>器 高 4.90<br>立ち上り高 1.35 | 内傾する立ち上りの口縁部内面に沈線を配する。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を多量に含む。                  | 右まわり           | Ⅲ A | 23       |
| 30 | 杯 身 | 口 径 11.60<br>器 高 4.40<br>立ち上り高 1.35 | 内傾する立ち上りの口縁部内面に沈線を配し、沈線は一部とぎれる。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整、内面は横ナデの凹凸が著しい。灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。  | 右まわり           | Ⅲ A | 27       |
| 31 | 杯 身 | 口 径 12.20<br>器 高 4.30<br>立ち上り高 1.50 | 内傾する立ち上りの口縁部内面に1周はしない沈線を配する。底部外面はへら削りし、底内面はナデ、他は横ナデを施す。灰褐色、焼成不良、胎土に多量の砂粒を含む。       | 左まわり           | Ⅲ A | 14       |
| 32 | 杯 身 | 口 径 11.70<br>器 高 4.35<br>立ち上り高 1.35 | 内傾する立ち上りの口縁部内面にはわずかに沈線が入る。底部外面はへら削りし、他は横ナデを施す。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。                | 右まわり           | Ⅲ A | 13       |
| 33 | 杯 身 | 口 径 11.00<br>器 高 4.05<br>立ち上り高 1.60 | 内傾する立ち上りの口縁部内面には途中で消失する沈線を配する。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整である。青灰色、焼成良好、胎土には多量の砂粒を含む。         | 左まわり           | Ⅲ A | 35       |
| 34 | 杯 身 | 口 径 11.70<br>器 高 4.30<br>立ち上り高 1.35 | 内傾する立ち上りの口縁部内面にはごく浅い沈線が入る。底部外面はへら削りし、他は横ナデを施す。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。                | 右まわり           | Ⅲ A | 18       |
| 35 | 杯 身 | 口 径 11.70<br>器 高 4.20<br>立ち上り高 1.60 | 内傾する立ち上りの口縁部内面には一部消失する沈線が入る。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。               | 左まわり           | Ⅲ A | 20       |
| 36 | 杯 身 | 口 径 10.00<br>器 高 4.30<br>立ち上り高 1.30 | 内傾する立ち上りの口縁部内面に沈線が入る。全体に厚手づくりである。底部外面はシャープにへら削りし、他は横ナデである。青灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。    | 左まわり           | Ⅲ A | 45       |

| 番号 | 器 種 | 法 量<br>(cm)                           | 特 徴                                                                                   | 砂 粒 移<br>動 方 向 | 時 期 | 出土<br>地点    |
|----|-----|---------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|----------------|-----|-------------|
| 37 | 杯 身 | 口 径 12.10<br>器 高 4.95<br>立ち上り高 1.60   | 立ち上りは長く、わずかに内傾する。口縁端部は丸身を有する。底部外面はへら削りし、他は横ナデである。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。                | 左まわり           | Ⅲ A | 19          |
| 38 | 杯 身 | 口 径 12.00<br>器 高 4.50<br>立ち上り高 1.50   | 内傾する立ち上りの口縁端部は丸味を有する。底部外面はへら削りし、平坦である。底部内面はナデ、他は横ナデ調整。青灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。           | 右まわり           | Ⅲ A | 8           |
| 39 | 杯 身 | 口 径 11.80<br>器 高 4.00<br>立ち上り高 1.20   | 内傾する立ち上りの口縁端部内面にはわずかに沈線が入る。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整。内面は凹凸が著しい。青灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。         | 右まわり           | Ⅲ A | 37          |
| 40 | 杯 身 | 口 径 11.60<br>器 高 4.50<br>立ち上り高 1.25   | 立ち上りは細味であり、内傾する口縁端部は丸くつくられる。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整。灰黄褐色、焼成不良、胎土に砂粒を含む。                    | 左まわり           | Ⅲ B | 周<br>溝      |
| 41 | 杯 身 | 口 径 11.30<br>器 高 4.40<br>立ち上り高 1.40   | 立ち上りは内傾し、途中からやや立ってくる。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整である。淡灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を含む。                      | 右まわり           | Ⅲ B | 周<br>溝      |
| 42 | 杯 身 | 口 径 10.80<br>器 高 4.25<br>立ち上り高 1.40   | 立ち上りは内傾し、途中から外湾ぎみに立つ。底部外面はへら削りし、他は横ナデ調整。灰色、焼成良好、胎土に若干の砂粒を含む。                          | 左まわり           | Ⅲ B | 周<br>溝      |
| 43 | 杯 身 | 口 径 11.30<br>立ち上り高 1.40               | 立ち上りは内傾し、途中から直立する。内外面とも横ナデ調整を施す。灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を若干含む。                                |                | Ⅲ B | 周<br>溝      |
| 44 | 杯 身 | 口 径 11.20<br>器 高 4.10<br>立ち上り高 1.40   | 立ち上りは内傾し、口縁端部は丸く造られている。底部外面は静止へら削りし、内底部はナデ、他は横ナデ調整。灰色、焼成良好、胎土に細砂粒を含む。                 |                | Ⅳ   | 周<br>溝      |
| 45 | 高 杯 | 口 径 13.10<br>器 高 18.5<br>脚 裾 径 12.50  | 杯部中ほどに突出面を有する。杯底部外面はへら削り上にカキ目、以下にカキ目を施す。2段3ヵ所に長方形の透孔が入る。灰黄褐色、焼成不良、胎土に小砂粒を含む。          |                | Ⅲ B | 周<br>溝      |
| 46 | 高 杯 | 脚 裾 径 10.65                           | 脚裾部の側面に凹線が入る。脚柱部中ほどに螺旋状の沈線が入る。内面はしほり痕を遺存する。脚柱外面にカキ目を施す。灰黄褐色、焼成不良、胎土に砂粒を含む。            |                | Ⅲ B | 周<br>溝      |
| 47 | 高 杯 | 脚 裾 径 9.20                            | 脚柱中ほどに2条、脚裾近くに1条の沈線が入る。脚柱内面にはしほり痕が残る。灰色、焼成良好、胎土に細砂粒を含む。                               |                | Ⅲ A | 土<br>器<br>列 |
| 48 | 直口壺 | 口 径 12.20<br>器 高 17.40<br>胴 部 径 12.10 | 長く、ゆるやかに外反する頸部には波状文が入る。胴部中ほどと、やや上面に1条の沈線を配し、この間に刺突文を施す。底部外面はへら削り、暗灰色、焼成良好、胎土に砂粒を多く含む。 | 右まわり           | Ⅲ A | 土<br>器<br>列 |

| 番号 | 器 種   | 法 量<br>(cm)                           | 特 徴                                                                                   | 砂 粒 移<br>動 方 向 | 時 期 | 出土<br>地点 |
|----|-------|---------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|----------------|-----|----------|
| 49 | 直 口 壺 | 口 径 7.70<br>器 高 14.65<br>胴 部 径 13.70  | 口縁部は内傾ぎみに立ち、端部は丸い。胴部中ほどに1条の沈線を配し、上下に刺突文が入る。底部外面はヘラ削り上をカキ目調整。頸部内外はしほり痕あり。暗灰色、焼成良好。     |                | Ⅲ B | 周 溝      |
| 50 | 提 瓶   | 口 径 7.30<br>器 高 16.00<br>胴 部 径 12.20  | 口縁部は肥厚させ2条の沈線を配する。口縁端部は若干の平坦面を有する。背面はヘラ削りし、胴部はカキ目調整する。灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。            |                | Ⅲ B | 周 溝      |
| 51 | 提 瓶   | 口 径 11.50                             | 大型の提瓶の口頸部と思われる。胴部中ほどに2条の沈線を配し、上下に波状文を施す。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。                         |                | Ⅲ B | 周 溝      |
| 52 | 提 瓶   | 口 径 10.6<br>器 高 23.50<br>胴 部 径 18.00  | 口縁部は肥厚させ、下面に凹線を配する。胴部の背面は平坦であり、ヘラ削り調整。鉤状の把手を有する。胴部全面部にはカキ目のち刺突文を施す。灰色、焼成良好、砂粒を含む。     |                | Ⅲ A | 1        |
| 53 | 提 瓶   | 口 径 7.90                              | 口縁端部は平坦面を有し、内面に段を有する。全面にカキ目を施す。灰色、焼成良好、胎土は良好である。                                      |                | Ⅲ B | 周 溝      |
| 54 | 甗     | 口 径 14.30<br>器 高 20.90<br>胴 部 径 17.70 | 2個の円孔を有する。胴部は3段に凹線を配し、その直上部に各々1列、3列、2列の刺突文を配する。口頸部にわずかに段を有する。暗灰色、焼成良好、胎土に砂粒を多く含む。     |                | Ⅲ A | 2        |
| 55 | 甗     | 口 径 11.80<br>器 高 13.60                | 口縁部と頸部の境は段を有する。胴部中ほどに2条の平行沈線を配し、上半部に波状文が入る。底部外面はヘラ削り、胴部はカキ目と刺突文を施す。暗灰色、焼成良好、細砂粒を多く含む。 | 右まわり           | Ⅲ B | 周 溝      |
| 56 | 子持ち壺  | 口 径 8.65                              | 有蓋の壺であり、胴部に1個の蓋をのせる。蓋受けの立ち上りは内傾し、端部は丸い。胴部は全面にカキ目を施す。暗灰色、焼成良好、胎土に微砂粒を含む。               |                | Ⅲ A | 土 器 列    |
| 57 | 罍 台   | 口 径 30.50<br>器 高 36.40<br>脚 根 径 24.00 | 口縁部は大きく外湾し、口唇下部に凹線を配する。4段に透孔が入り、上段部は円形3個、以下は三角形4個の透孔である。暗灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。            |                | Ⅲ A | 5        |
| 58 | 罍 台   | 口 径 28.60<br>器 高 35.40<br>脚 根 径 26.50 | 5段に透孔が入り、上段部は円形3個、上から2～3段は3個、4、5段は4個の三角形透孔が入る。上から4段目には、鳥を形どった透孔が入る。暗灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。 |                | Ⅲ A | 4        |
| 59 | 罍 台   | 口 径 32.20                             | 杯部の浅い罍台であり、口縁部は肥厚させる。透孔は3段3個長方形のものが入る。暗灰色、焼成良好、胎土に細砂粒を多量に含む。                          |                | Ⅲ A | 土 器 列    |
| 60 | 罍 台   |                                       | 杯部の小片である。外面は平行叩き上を横ナゲ調整する。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の粗大の砂粒を含む。                                    |                | Ⅲ A | 土 器 列    |

| 番号 | 器 種 | 法 量<br>(cm)                           | 特 徴                                                                                  | 砂 粒 移<br>動 方 向 | 時 期 | 出土<br>地点 |
|----|-----|---------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|----------------|-----|----------|
| 61 | 器 台 |                                       | 脚裾部の底面は平坦面を有する。2条の沈線が入り、直下に波状文を施す。灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。                                  |                | Ⅲ A | 土器列      |
| 62 | 器 台 |                                       | 脚裾部の底面は平坦面を有する。現在部上面には透孔が入る。1条の沈線を配し、直下に波状文を施す。灰黄褐色、焼成不良、胎土に多量の小砂粒を含む。               |                | Ⅲ A | 土器列      |
| 63 | 器 台 | 口 径 15.00                             | 浅い杯部を有し、口唇部は平坦である。口縁部下には6個の把手状の貼付がみられる。2段に3個の台形透孔が入る。暗灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。              |                | Ⅲ A | 28       |
| 64 | 器 台 | 脚 裾 径 27.80                           | 17cmの位置に屈曲線を有し、上部は筒形となる。現存部には5段に透孔が入り、各3個の台形透孔である。63とは同一個体であり、復元器高は48cm程であろう。        |                | Ⅲ A | 28       |
| 65 | 横 瓮 | 胴 部 径 37.00<br># 27.60                | 口頸部を欠損する。外面は目のあらい平行叩き、内面は同心円と円弧叩きが残る。灰色、焼成良好、胎土に小砂粒をわずかに含む。                          |                | Ⅲ A | 土器列      |
| 66 | 横 瓮 | 胴 部 径 38.50<br># 29.50                | 口頸部を欠損する。外面は平行叩きの上からカキ目調整し、内面は同心円と円弧叩きを施す。灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を含む。                       |                | Ⅲ A | 40       |
| 67 | 甕   | 胴 部 径 37.00                           | 口頸部を欠損する。外面は平行叩き上を横方向のカキ目を一定間隔で施す。内面はシャープな同心円と円弧叩きが入る。灰色、焼成良好、胎土に大粒の砂粒を含む。           |                | Ⅲ A | 土器列      |
| 68 | 甕   | 胴 部 径 42.70                           | 胴部外面は平行叩きし、上面部にのみカキ目がみられる。内面は同心円叩きを施し、底面近くは円弧叩きとなる。灰色、焼成良好、胎土に細砂粒を含む。                |                | Ⅲ A | 土器列      |
| 69 | 甕   |                                       | 口縁部上面は平坦面を有する。粘土貼付により肥厚させ2条の凹線が入る。頸部には内外両方行からの穿孔による円孔があく。暗灰色、焼成良好、胎土に多量の砂粒を含む。       |                | Ⅲ B | 墓道       |
| 70 | 甕   | 口 径 44.40<br>器 高 78.90<br>胴 部 径 65.60 | 口縁部を肥厚し、口唇部下面に凹線を配する。頸部は3段に沈線を配し、この間に波状文を入れる。胴部外面は平行叩き、内面は同心円叩きを施す。灰色、焼成良好、胎土に砂粒を含む。 |                | Ⅲ A | 6        |

## IV おわりに

### ① 墳丘・石室について

古墳は内径24m、周溝を含めた外径28mの円墳であり、石室前面部の1カ所に通路となるブリッジを有している。周溝はこのブリッジ前面に弧状を呈する2重の構造を有するものであった。この周溝はともに石室の奥壁の中心点を中心として正円を描くものであり、企画性を有している。古墳の外部施設としては円筒・形象埴輪があり、円筒埴輪は重量を基にした計算では74本という数値を得た。人物埴輪は5体以上と思われ、いずれも石室前面部を意識して立て並らべていたと思われる。円筒埴輪はほぼ1mおきに立てられたものであろう。

石室は単室の横穴式石室であり、平面形態は筑後地区に通有の胴張り形態である。立山山8号墳は当該墳とは同一時期の築造になるものであり、主体部も同様に単室の横穴式石室でありその平面形は胴張りを呈する。奥壁には腰石として2個の大石を立てており、当該墳が下段からすべて扁平な石材の平積み手法をとるのとは異なっている。

### ② 須恵器について

石室前面の墳丘左側からは総数56個体以上を数える須恵器・土師器からなる土器列が検出され、これらの土器は古墳築造当初の一括品として取り扱える価値の高いものである。土器列からの出土土器は次の如くである。

#### 須恵器

杯蓋19個体

杯身16個体

提瓶 1

壺 1

高杯 1

器台 7

横瓮 2

甕 4

#### 土師器

杯 2

高杯 5

### A. 型式分類

#### III A期

杯蓋は天井部と体部の境が鋭く稜をなして突出するものと、沈線を配するものがある。口縁端部内面には段をなすものと、沈線を配するものとがみられる。杯身は立ち上りが1.4~1.8

cmと長く、内傾しており、口縁端部は沈線が入る。蓋杯は口径が大きいのが大半であり、一部のもの（胎土・焼成・色調においてもこの一群は他と異なっている）はこれよりもひとまわり小型である。この相違は須恵器の生産された場所の違いと考えられよう。八女市中尾谷窯跡からはⅢA期の須恵器が出土しており、ここでは杯蓋においては当該墳出土品と似通った特徴を有するが、杯身においては当該墳出土品の方が立ち上り端部に沈線を配する点でより古式である。したがって、同じⅢA期であっても、当該墳出土品の方が古い形式を有するものであろう。筑前地区ではあるが、大野城市野添6号窯跡出土のⅢA期の蓋杯は杯身の立ち上り端部内面に段を有しており、当該墳出土品と時期的には接近したものである。

提瓶は大型品が見られ、肩部には把手がつき、胴部の背面は平坦面を有するものである。

器台は高杯形と筒形の2種類がみられる。高杯形器台の脚部は、杯部との接合面から直線的に開くものであり、これは第Ⅱ期の岩戸山古墳出土の器台脚部が、脚中ほどでいったんずばまってから開くのと大きな違いがみられる。しかし透孔は最上段部のみが円形透孔であるという共通点もみられる。杯部は岩戸山古墳出土品よりも深く、これだけを見ると、当該墳出土品の方が古式の様な感を受ける。

甕は2孔を有する大型の特殊なものである。

高杯はこの時期には長脚2段透孔の入るものが出現しているが、当該出土品(47)は長脚ではあるが透孔が入っていない器種である。

### ⅢB期

杯蓋は天井部と体部の境に1～2条の沈線が入り、口縁端部内面は内傾する平坦面を有するものである。杯身の立ち上りは塚ノ谷窯跡群出土品中に見られる特徴をもつ。すなわち、立ち上り基部は内傾し、中ほどから外湾ぎみに立ってくるものであり、塚ノ谷窯跡群からの供給品とも考えられる。

高杯は長脚2段透孔が入るものであり、脚全面にカキ目調整を施している。

## B. 整形・焼成・胎土

ⅢA・B両期の蓋杯は天井部及び底部は回転ヘラ削りを施しており、その範囲は前者の方が広い範囲に行く。このヘラ削りの際に生じた砂粒の走向はクロクロの回転とは逆の動きとなるためクロクロの回転方向の傾向性を見るため、砂粒の走向を検討する。ⅢA期の蓋杯34個体のうち左廻りは20個体、右廻りは14個体であり、やや左廻りが多い。ⅢB期では左廻り2個体、右廻り1個体である。ⅢB期では3個体からの検討であるため普遍的な数値を得ない。ⅢA期の蓋杯ではI a・b類は蓋・身とも、I d類の身のすべては左廻りであり、I d類の蓋は6個体のうち5個体は左廻りである。c類の蓋はすべて右、身は右4、左3、e類は左1、右2である。この様に分類した土器のうちa・b・d類はほとんどが左廻りであり、c・e類はその両者が見られるという傾向をしめす。

胎土についてはⅠ類(ⅢA期)Ⅱ類(ⅢB期)、Ⅲ類(Ⅳ期)は異なる。Ⅰ類は胎土に多量の砂粒を含み器表はあらくザラザラしている。Ⅱ類は胎土は砂粒を含むものの良好で、器表はなめらかである。焼成についてはⅠ類ではd類の14・18・19のみ不良であるが他はすべて硬質である。Ⅱ類はすべて普通の焼成である。

#### C. ヘラ記号

ヘラ記号はⅢA期では蓋杯の12個体に3種類みられる。ヘラ記号の位置は杯蓋では天井部外面、杯身では底部外面に見られ、内面にあるものは全くない。ⅢB期では提瓶の胴部と杯身の底部外面に各1個入る。ⅢA期に比定される中尾谷窯跡群の1号窯内出土品にヘラ記号は1種類見られるが、当該出土品と同一のものはない。ⅢB期の塚ノ谷4号窯跡からは30余種のヘラ記号が観察されており、当該出土の2種類と同一記号を見出し得る。うち1種は山形を連続させたやや複雑なものであり、どこにでも存在するというものでもなく、器形の特徴や、地理的な条件を考慮すれば、同一記号をもって供給先と考えても良さそうである。

#### D. 土器列について

石室前面部の左側にあたる墳丘中からは弧状に須恵器・土師器を60個体近く並べた土器列が長さ5m、幅1mの範囲に見られた。提瓶、甕、器台、甕、横瓶等はいづれも墳丘に据えつけており、大甕についてはすわりを良くするため底面にあたる部分を掘りくぼめて据え、さらに石を支えとして用いている。器台の杯部には土師器の杯身をのせており、出土の仕方からこの土師器杯には何らかの食用となるものを入れていた事がうかがえる。大甕については押圧されて割れてはいたものの復元すれば底部まで完全な形をしており、底部は穿孔していない。これは岡垣町東田古墳群の11号墳から発見された290個体の須恵器・土師器からなる土器列群中の大甕の取り扱い方と異なりをみせる。すなわち東田11号墳では7個体の中へ大甕のすべてが意識的に底部を破損して据えられていた。

土器列は墳丘の築造がある程度終了した時点での墓前祭として供献されたものであり当時の送葬儀式の一面をうかがう事ができた。

#### ③ 年代について

古墳築造当初のものと考えられる墳丘前面の土器列出土土器はⅢA期に属しており、その実年代は6世紀中葉頃に比定される。ⅢA期でも若干の土器はⅡ期に近い形態の特徴が強いものが含まれているため、ⅢA期でも前半に属すると思われる。したがって実年代を6世紀中葉でも前半に近い時期に比定する。周溝からはⅢB、Ⅳ期の土器を出土しており、6世紀後半～未までの追葬が考えられる。

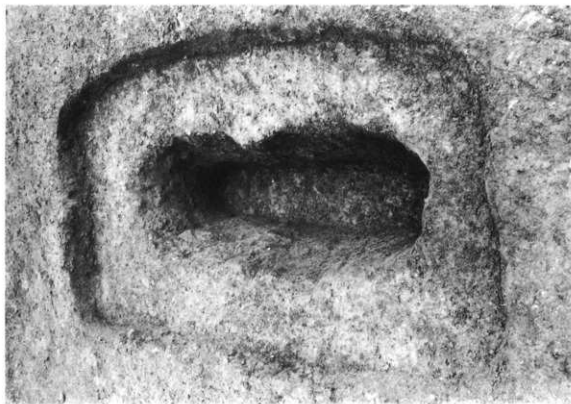
註1 「野添・大浦窯跡群」福岡県文化財調査報告書 第43集 福岡県教育委員会 1970

註2 「中尾谷窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅱ 八女市教育委員会 1970

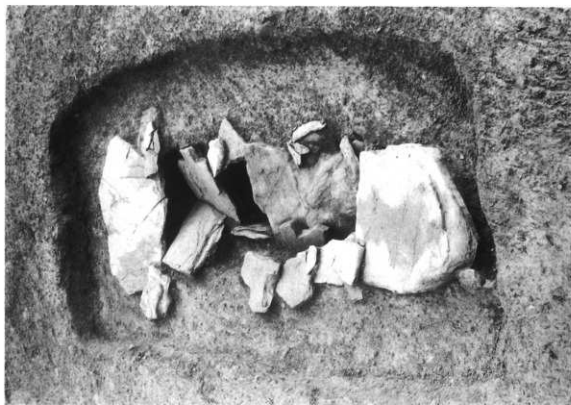
註3 「東田古墳群」岡垣町教育委員会 1977

図

版



石室土壇臺（蓋石除去後の状態）



石室土壇臺（地土除去後の状態）



立山山13号墳墳丘全景（発掘調査前）



立山山13号墳墳丘と石室全景



立山山13号墳玄室全景



立山山13号墳玄室奥壁



立山山13号墳玄室左側壁



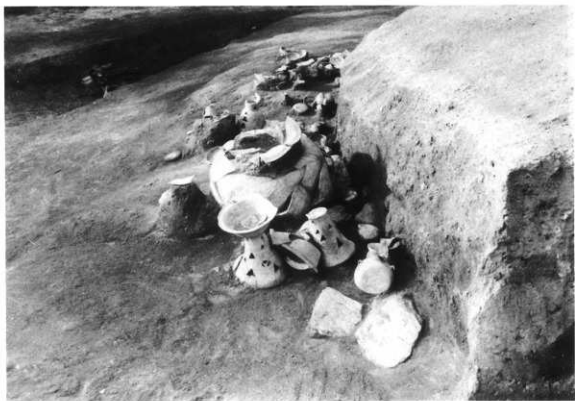
立山山13号墳石室と墓道



立山山13号墳横丘断面



立山山13号墳遺物出土状態



立山山13号墳土器列出土狀態



立山山13号墳土器列出土狀態



立山山13号墳土器列出土状態



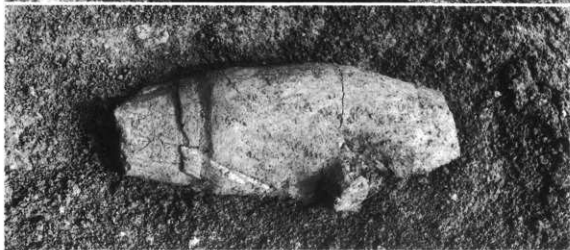
立山山13号墳土器列出土状態



立山山13号墳埴輪出土状態



立山山13号墳円筒埴輪出土状態



罐輪出土狀態 上・円筒罐輪，中・人物罐輪，下・人物罐輪（足）



1

3



2

4



23



22



21



29



20

27



28







4



18



13



26







13



19



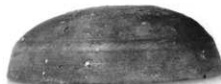
14



21



15



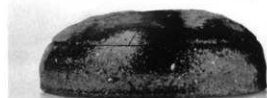
22



16



23



17



24



18



25



27



33



28



34



29



35



30



36



31



37



32



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



55



63



54



64



56



58



70



50



65



51



66



52



53



68



58



57



71



73



72



74



75



76



80



79



81



78



82



77

# 立山山13号墳

八女市文化財調査報告書

第 11 集

昭和59年3月31日

発行 八女市教育委員会  
八女市大字本町647

印刷 青柳工業株式会社  
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31